
午後の実験

住ノ江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午後の実験

【著者名】

住ノ江

【あらすじ】

ある日、僕は彼女に恋をした。

(前書き)

カエルが苦手な方は気をつけてください。

『吊り橋理論』といつものがある。

むらむらと揺れる吊り橋の上で出会った男女は、そうでない平坦な場所で出会ったときよりも高い好感度を互いに持つという。

これは、吊り橋を渡ることにより生じている興奮と、異性と会つことで生じている興奮を取り違えるためにおこる現象である。また、緊迫した状況を共有することによって連帯感や恋愛感情が生まれるためとも言われている。

休み時間、博識のY山くんが突然そんなことを僕に言つてきた。わけがわからない。

彼はなぜか哀れむような目をしてその「高説を僕に説いていらっしゃるが、まったくもってそのありがたみがわからない。なぜだろう、と考える。

なにか、そんなことを言われるようなことがあつただろうか。

最近僕のまわりで起きた変化と言えば、彼女しかない。そうだ、軽く彼女について紹介しよう。

彼女の名前は古川衣澄^{ふるかわいすみ}、通称スミちゃん。もちろん皮肉だ。

彼女はクラスでも一目置かれる存在であり、ついでに距離もおかれていた。なぜかといえば、彼女が少し変わっているからであり、それまでまったく交流のなかつた僕でさえ、彼女は少し変だと認識していた。

彼女の容姿はとてもよかつた。つやのある黒髪は背中に流れようで、前髪は眉できつちりと切りそろえられていた。少しつりあがつたアーモンド型の目はくりつとして大きく、冷たい印象はあるものの、美少女と言つて相違ない。

容姿の整つた彼女はもちろん噂になつたが、彼女にはまた別の噂

があつた。

噂によれば、彼女の趣味は『解剖』らしい。

はじめてメスを握ったのは三歳の誕生日とか、家の二ワトリをさばいて食べるんだとか、神棚にウーパールーパーのホルマリン漬けが奉^{たてまつ}られているだとかわけのわからない、だが不気味な噂がまことしやかにささやかれていた。

彼女にアタックしようとしていた男共もその不気味な噂を聞くと、解剖されちゃたまらない、と言つて彼女に近づかなかつた。

「全然澄んでねえじゃん」

そういうわけであだ名はスミちゃん。もちろん皮肉だ。

さて、そんなある意味時の人であるスミちゃんとぼくが接点を持つたのは、ある日の午後のことだつた。

その日の生物の授業は実験で、あらうことか、内容は『カエルの解剖』だつた。

なにが楽しくて食後にそんなことせにやならんのか、とクラス中が不平をもらしたが、先生が「カエルも結構うまいんだ」というとクラス中が静まり返つてしまつた。

どうやら先生は昼食がまだつたらしい。

しかし僕はそれどころではなかつた。

カエルは平氣だ。カエルを見ただけでキャーキャー言つような女々しい男ではない。

がしかし、平氣なのはカエルであつて、カエルの中身ではないのだ。

生物の教科書の表紙裏にある解剖^{ハクバト}写真を見るだけで冷や汗が出る僕を見て蔑むがいい。ダメなもんはダメだ。

僕は困り果てていた。先生はカエルの数が足りないからと言つて、生徒にペアを組ませて二人で一匹のカエルを解剖することとなつていた。名前の順で組まれた僕、深沢悟^{ふかさわ さとる}のペアはスミちゃんだつた。

それにしても一人で一匹のカエルをさばくとは笑いことにほど

がある。たとえば結婚式での一人のはじめての共同作業がケーキ入刀ではなくカエル入刀だったら、父母どころか親戚中がその光景に涙するだろう。一応言つておくが、この時点では僕が彼女に抱いていた感情は「彼女は変」、それだけだ。

それにしたつて、いつぱしの高校男児である僕は女の子の前で情けない顔はしたくなかった。しかも相手は学年きつての美少女、スミちゃんだ。

僕は気持ちを落ち着けようと、カエルのおいしさについて語る先生を無視して、ひたすら時計の秒針を数えていた。

三百一十七まで数えたところで、突然隣にいるスミちゃんが声をかけてきた。

「深沢くん、もう実験始まってるよ」

「え、え。あそう、じゃあはじめようか」

そうは言つものの、僕は机上のカエルを見ることができなかつた。訝しみながら僕を見る彼女に、

「あ、えと、スミちゃんはさ、こいつの得意なんだよね。やっていいよ。僕、秒針数えてるから」

言つてからわけがわからないと自分でも思つたが、彼女はぱつと表情を明るくして、

「え、いいの？ うれしい！ カエルなんて久しぶり
聞かなかつたことにした。」

彼女は意気揚々とカッターを持ち、おそらく解剖を始めたのだろう。僕の視界に映らないところからなにやら精神衛生上よくなさそうな音がする。しかしきつと僕の聞き間違いだ。僕の耳には秒針が時を刻む音しか聞こえない。

そうして千一百七十九まで数えたところで、彼女が「あ、ピンが足りない」とつぶやくのが聞こえた。

「深沢くん。悪いんだけどそこ押さえてくれる？」

「……え、どこ？」

そこにあるものを絶対に視界に映さないようにしながら、僕はよ

ろよりと手を机の上にさまよわせた。

「じーじー、じーじー」

そう言つてスミちゃんは僕の手を取り、僕の手をなにかに押し付けた。

しつとりとしたなにかが手に触れて一瞬気が遠くなりかける。だが僕も漢だ。みつともないところは見せられない。大丈夫、見えてはいけない。

彼女はまた解剖を再開したようだつた。せつかく数えた秒針もどこまで数えたかわからなくなつてしまつた。仕方なくまた一から數え始める。

手元を決して見ないようにしながら百八十六まで数えたといひで、また彼女がなにか言つた。

「うー、よく見えない。深沢くん、指、あぶないよ

「え？」

「……あつ！」

一瞬の出来事だった。

人差指に鋭い痛みが走つたと思うと、視界に哀れな力エル様が映る。

ぱっくり開いたおなか。ところせましと詰まる●

「きやああああああああ！」

思いがけず女々しい悲鳴を上げながら僕は丸椅子ごとひっくり返つた。

何事かと静まる教室。

落書きだらけの丸椅子が僕を嘲笑うようにぐるぐると回つていた。

「……ふふふ」

突然上方から笑い声がした。

見るとスミちゃんが笑つていて。刃物を握つたまま。

いつもは冷たい仮面が張り付いているようなその綺麗な顔には、暖かな微笑が浮かんでいた。

そのとき、僕は自分の胸が高鳴つているのに気づいた。

春の暖かさのような微笑。僕とカエル様の血が付いた刃物。

この胸の鼓動は、いつたい……。

「……ふ、ふふふ、あはは」

「ふふふ」

気づけば僕たちは互いに笑いかけていた。

依然胸のドキドキは収まらない。

女神のような微笑。鋭く光る刃物。

クラスメイトが氣味悪そうに見つめる中、僕たちはいつまでも笑っていた。

僕は気付いたのだ。

これが、恋なんだ。

その日から僕はスミちゃんに話しかけるようになつた。スミちゃんも僕が気に入ってくれたのか、とても楽しそうに話してくれる。「だつて深沢くん、叫び声が乙女なんだもん」そう言って彼女に笑われたが、そのあと怪我した指を彼女に手当してもらえたので役得である。

P山くんが話しかけてきたのはそれからのことだった。だが、思い返してみても意図がまったくつかめない。

僕の机の前で演説をし終えたP山くんに向かつて、「だからなんなの？」と言つたら、P山くんは少し傷ついたようにうつむいて去つた。

たしかに僕は盲田的に彼女に夢中かもしれない。だが、だからなんだといつのだ。

恋は盲田、馬耳東風。

なんぼのもんじやい、五里霧中。

この熱い想い、もうだれにも止められない！

(後書き)

『吊り橋効果』、気になる方はウェブでどうぞ。

また、作中のように刃物で脅しつけるのは大変危険なので絶対真似しないでください。やるならジエットコースターの上で愛を叫ぶなどしてください。もちろん責任は取りません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860d/>

午後の実験

2010年10月8日15時28分発行